

2025（令和7）年度 調査報告書



大阪大学大学院人間科学研究科／人間科学部
発達認知科学研究分野

<https://babylab.hus.osaka-u.ac.jp/>



発達認知科学ラボ

Developmental Cognitive Science lab

●研究活動にご協力いただいているお子さま、保護者さま、先生方へ●

2021年度に発足された赤ちゃん研究員制度によって、本年度も多くのお子さまが大学での調査に参加してくださいました。2023年度からは「赤ちゃん・子ども研究員」制度へと名称が改められ、さらに多くのお子さまや保護者のみなさまにご協力いただいています。また、地域の園や学校でも多くのお子さまが調査に参加してくださいました。お力添えをいただきました関係各位に心より御礼申し上げます。

今年度から、研究室の名前が「比較発達心理学分野」から「発達認知科学分野」へと変更になり、研究室のwebサイトやロゴも大幅にリニューアルしました。赤ちゃん・子どもが世界をどのようにみているのか、人間発達をより深く、科学的に理解するために、今後もいっそう研究活動に専心するつもりです。

私たちの研究は、お子さまと保護者さま、園・学校の先生方の研究への理解と参加によって成り立っています。ご参加いただいたお子さまと保護者さまには心より感謝申し上げます。なお、今回は残念ながらご予定が合わなかった方や調査の対象年齢の都合で調査をお願いできなかった方は、登録していただいたにも関わらず大変申し訳ございませんでした。もし次回に参加する機会がありましたら、どうぞよろしくお願い申し上げます。

本研究報告書は、私たちの研究室が本年度に行った調査結果をまとめたものです（継続研究はここでは報告せず、調査が終わり次第報告いたします）。すでに学会等で発表したり、論文にまとめたりして社会に発信しているものもあれば、問題提起の段階にある知見もあります。これらの発見や知識は、みなさまのご協力があったのものであることを忘れずに、日々の研究にあたりたいと考えています。

ご自身が関わった研究成果はもちろん、その他の研究成果にも目を通していただくと幸いです。なお、学会や論文で未発表のデータを多く含んでおりますので、報告書の詳しい内容については、InstagramやX（旧Twitter）といったSNS等で公開されることがありますよう、どうぞよろしく願いいたします。



大阪大学大学院人間科学研究科

教授 鹿子木 康弘

講師 萩原 広道

目次

赤ちゃん・子ども研究員のみなさまにご協力いただいた調査

子どもは誰に分けてあげる？ — 人や動物、ロボットへの分配行動の研究 —	01
パソコンからの言葉がけはロボットや人からの言葉がけと同様に粘り強さを高めるのか？	02
部屋の散らかりは子どものふるまいを変えるのか	03
図形の動きから「よい・わるい」を感じ取る？	04
乳幼児の言語的な発達にともなって、養育者の関わりは変化するのか	05
5, 6歳児は家事・仕事の分担をどのように考えているのか	06
赤ちゃんは「いいことをした人」にいいことが起こると思ってる？	07

目次

地域の園・学校のみなさまにご協力いただいた調査

子どもは誰に分けてあげる？ 一人や動物、ロボットへの分配行動の研究 —	08
ルール違反への対応は相手・文化によって変わる？	09
「わるいこと」への対応にはどんな動機がある？	10

おねがいとお知らせ

- 本報告書の内容は、学会や論文で未発表のデータを多く含んでおります。報告書の詳しい内容については、InstagramやX（旧Twitter）といったSNSなどで公開されることがないよう、よろしくお願いいたします。
- まだデータ収集の途中であり、報告段階に至っていない調査については、次年度以降の報告書にてご報告さしあげます。ご容赦くださいますようお願いいたします。

＼ Instagramはじめました ／



調査にご協力くださった「赤ちゃん・子ども研究員」の写真を掲載！
⚠️ ご家族の許諾を得て掲載いたします。無断転載はご遠慮ください。



子どもは誰に分けてあげる？ — 人や動物、ロボットへの分配行動の研究 —

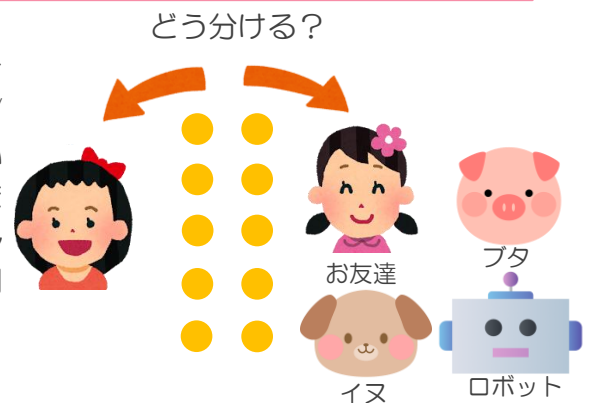
千々岩 眸（大阪大学大学院人間科学研究科 学振特別研究員）

●背景・目的

子どもは成長の中で、「思いやり」や「公平に分ける気持ち」を身につけていきます。これらの行動は、ふだんは友達や家族など人に向けられることが多いですが、動物やロボットのように、人とは異なる相手に対しても同じように表れるのかは、ほとんど調べられていません。また、私たち大人は、イヌやネコを家族のように大切にする一方で、ブタやウシなどは食べ物として捉えるなど、動物の種類によって接し方が異なることがあります。こうした考え方がいつ身につくのかを知ることも、子どもの心の発達を理解するうえで重要です。そこで本研究では、5～6歳の子どもが、後からシールと交換できるボールを様々な相手にどのように分けるのかを調べました。

●方法

後から自分の好きなキャラクターのシールと交換できる10個のボールを、自分と、他の幼稚園に通うお友達/公園に遊びに来ているイヌ/牧場にいるブタ/科学館にいるロボットとで、それぞれどのように分けるかを調べました。お友達/イヌ/ブタ/ロボットに分けてあげるボールは、それぞれ相手の好きなものと交換できることを説明しました。

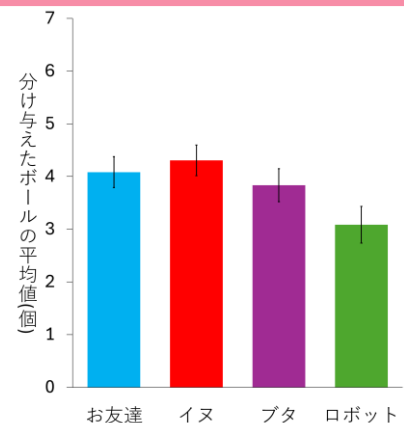


●結果

幼稚園や保育園で実施した調査の結果と合わせて報告させていただきます。

子どもたちは、お友達には平均4.08個、イヌには平均4.31個、ブタには平均3.83個、ロボットには平均3.08個のボールを分け与えました。

分け与えたボールの数は、ロボットが最も少なく、イヌが最も多くなりました。



●考察・今後の展望

今回の調査では、子どもたちは人だけでなく、イヌやブタ、ロボットにもボールを分けてあげる様子がみられました。特に、ロボットよりもイヌに多く分ける傾向があり、子どもがイヌを、単なる物ではなく、関わりをもつ相手として捉えている可能性が示されました。また、人、イヌ、ブタの間には大きな違いは見られず、幼児期には生き物に広く思いやりを向ける傾向があることがうかがえました。こうした考え方は、成長する中で社会や文化の影響を受けながら変化していく可能性があります。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

ありがとうございました！ 今後も動物と子どもの関係について研究を頑張ります！

パソコンからの言葉がけはロボットや人からの言葉がけと同様に粘り強さを高めるのか？

石川 萌子（大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程3年）

●背景・目的

困難であってもやり続ける「粘り強さ」は、将来の学業成績などに関連する重要な力だと言われています。そのため、子どもの粘り強さを育む方法が注目されています。これまでに本研究室で実施した研究から、ロボットや人が課題中に言葉がけをすることが子どもの粘り強さを高めることが明らかになっています（調査1・2）。そこで今年度は、パソコンからの言葉がけは粘り強さを高めるのに効果的なのかを調べました（調査3）。

●方法

調査1には4～5歳のお子さま108名、調査2には4～5歳のお子さま54名、調査3には4～5歳のお子さま27名にご協力いただきました。粘り強さは、開けるのが難しい木箱を開けようとするのくらいの時間課題に取り組んだかで調べました。調査3では、子どもが木箱課題に取り組んでいる際に、パソコンから音声流れました。この音声は、調査1や調査2でロボットや人が行った言葉がけと同じ内容でした（言葉がけの内容は、子どもが課題へどのくらいの時間取り組んだかを知らせるものでした）。

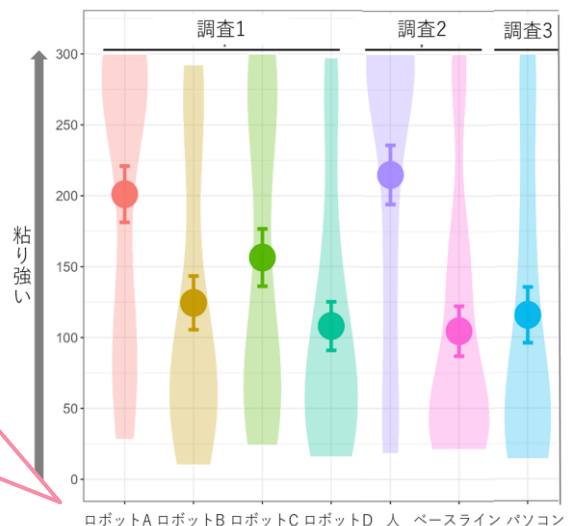


●結果

調査1～3から、以下のことが明らかとなりました。

- ①ロボットや人が、課題中に言葉がけを行うことは、子どもの粘り強さを高める
- ②パソコンからの言葉がけは粘り強さを高めない
- ③課題中の子どもの様子：子どもはロボットや人にはよく話しかけるが（例：「ロボちゃん！」「どうやって開けるの？」）、パソコンにはあまり話しかけない

ロボットA・C…ロボットが言葉がけをする
ロボットB・D…ロボットは言葉がけをしない
人…人が言葉がけをする
ベースライン…子どもは課題に1人で取り組む
パソコン…パソコンが言葉がけをする



●考察・今後の展望

本調査では、ロボットが子どもの粘り強さを高めるのに有効なのかを、人やパソコンと比べることで調べました。子どもと社会的な関係性を築けるロボットや人が、子どもが課題に取り組んでいる際に、言葉がけをすることが粘り強さの向上に重要だと考えられます。今後は、子どもの粘り強さを高めるために、どのような関わり方や環境が役立つのかについて、引き続き調査を進めていく予定です。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

本調査はたくさんのお子さまに協力していただきました！ありがとうございました。

部屋の散らかりは子どものふるまいを変えるのか

大西 実乃里（大阪大学大学院人間科学研究科 修士課程2年）

●背景・目的

私たちの行動は、置かれた環境によって変わることがあります。例えば、ルールを守るかどうか、周りの状況に影響されることが知られています。大人の場合、ルール違反があるにも関わらず誰も注意しない環境では「ルールが重要視されていないのだ」と感じ、自分もルールを破りやすくなることが分かっています。では、子どもも大人と同じように、ルール違反に対して十分な指導がされていない場面では、ルールを破りやすくなってしまおうのでしょうか？本研究ではこの点に注目し、5～6歳のお子さまを対象に調査を行いました。

●方法

お子さまには、整理された部屋、または散らかった部屋で、一人でクイズに取り組んでいただきました。整理された部屋では、本やお絵描きの紙がきれいに整理されていた一方で、散らかった部屋では、本の表紙が破られ、紙やゴミが散らかっていました。加えて、調査者が「まあいっか」と言って散らかったものをそのままにする行動を見せました。クイズ中には隣に答えの紙を置き、お子さまがその答えを見て写すかどうかを観察しました。

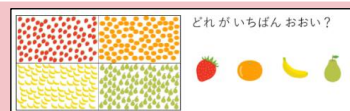
◇整理された部屋



◇散らかった部屋



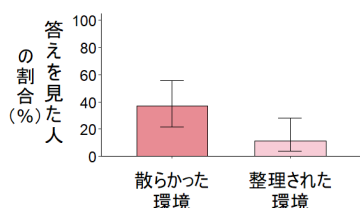
難しいクイズ



答え



●結果



散らかった部屋と整理された部屋ではふるまいが異なり、散らかったまま放置された部屋でクイズをした方が答えを見るお子さまが多くなりました。具体的には、散らかった部屋で37.0%、整理整頓された部屋で11.1%の人が答えを見ていました。

●考察・今後の展望

本研究から、散らかった部屋が放置されている場合に、子どももルールを破りやすくなることが分かりました。ただし今回は「散らかったまま放置され、大人も気にしていない」状況について調べました。一時的に散らかっている場合や、大人が片付けるべきと思っている場合についてはまだ調べられていません。今後はこのような場面も調べることによって、子どものふるまいを変える要因についてより詳しく明らかにする必要があります。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご協力いただきありがとうございました！教育環境改善に役立つよう繋げて参ります。

図形の動きから「よい・わるい」を感じ取る？

白 雅盈（大阪大学大学院人間科学研究科 修士1年）

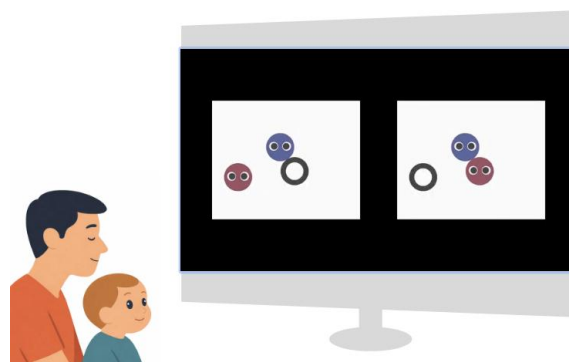
●背景・目的

赤ちゃんは、言葉がわからない時期でも、人の行動の「やさしい」「いじわる」といった違いを感じ取っている可能性があります。ただ、それを社会的・感情的な意味として理解しているかは、まだはっきりしていません。そこで、図形どうしのやりとりをどう見ているかを調べました。

●実験1：図形の動きを「相手への行動」として見るか？

赤ちゃんに2つのアニメーションを見比べてもらいました。どちらも同じ動きですが、一方は「図形どうしの関わり」、もう一方は「図形と物体の接触」です。目の動きを測定し、どちらをより長く見るかを調べました。

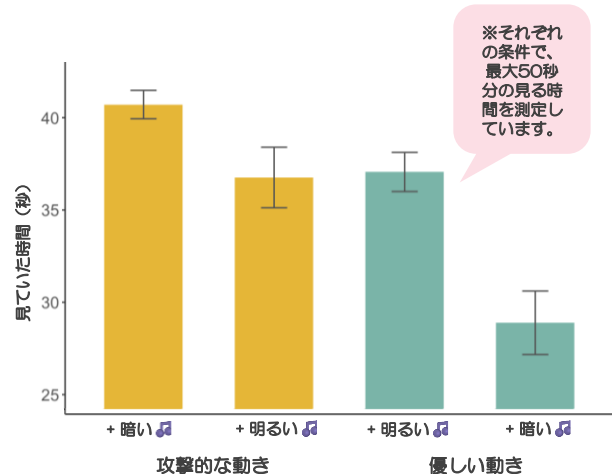
赤ちゃんは、図形どうしが関わる動きを、より注意して見ていました。同じ動きでも、「相手がいるやりとり」として捉えている様子が見られました。



●実験2：動きと「よい・よくない感じ」を結びつけるか？

図形どうしのやりとりの映像を見たあとに、明るい印象の音楽、または暗い印象の音楽を流しました。動きと音楽の組み合わせが合っている場合と、合っていない場合を比べました。

その結果、赤ちゃんは、「やさしい動き+明るい音楽」、「攻撃的な動き+暗い音楽」といった「合っている組み合わせ」を、より長く見ていました。動きの印象と気持ちの雰囲気や自然に結びつけて見ている可能性が示されました！



●考察・今後の展望

今回の結果から、まだ言葉を話さない時期の赤ちゃんでも、単純な動きの中から「関わり」や「気持ちの違い」を感じ取っている様子が見られました。赤ちゃんの理解の力の豊かさについて、今後もさらに明らかにしていきたいと考えています。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

実験へのご参加ありがとうございました！お子さまたちの健やかな成長を願っています。

乳幼児の言語的な発達にともなって、 養育者の関わりは変化するのか

春木 海咲（大阪大学人間科学部 学部4年）

●背景・目的

子どもは、動詞（例：履く）より名詞（例：くつ）を先に獲得すると言われていました。しかし最近の研究から、子どもは最初から「くつ」と「履く」をはっきり分けて理解しているのではなく、「くつ」のような名詞の意味を「くつを履く」という出来事として、まとめて理解している可能性があることが分かってきました。では、子どもが成長して、物体と行為を分けて理解できるようになる過程で、養育者の関わりはどう変わるのでしょうか？本研究では親子が一緒に遊ぶ場面に注目し、子どもの月齢によって、養育者の語りかけや行為がどう変わるのがかを調べました。

●方法

本研究では、生後8ヶ月から26ヶ月のお子様とその保護者の方による親子遊びの様子が記録された動画データを解析に用いました。親子遊びでは、使い方が比較的明確な「ブラシ」や「はたき」などの日用品が用いられ、普段どおりに親子で遊ぶ様子が記録されていました。その様子を、①養育者の動詞発話や、②養育者の名詞発話と、行為（「ブラシ」であれば「こする」）が同じタイミングで生じているかなどに注目して分析しました。



●結果

分析の結果、子どもが物体と行為を分けて理解できるようになる少し前から、養育者は「こする」「まぜる」などの動詞発話や、「どう使うものか」「どんな動きをするか」といった内容を子どもに話しかけることが多くなっていました。さらに、月齢が低い子どもに対しては、「ブラシ」と言いながら「こする」行為をするといった場面が多く見られましたが、子どもの月齢が上がると、こうした名詞と行為の共起は減少しました。つまり、子どもの発達に伴って、養育者は名詞発話を主に物体と結びつけ、行為から切り離すようにしている可能性が示唆されました。

●考察・今後の展望

これらの結果から、養育者は子どもの成長に合わせて関わり方を変えていることが示されました。特に、子どもが物体と行為を区別できるようになる少し前から、動詞発話を増加させ、子どもの動詞獲得を促している可能性が明らかになりました。また、子どもが物体と行為を区別しにくい時期には、物体の名前の発話と共に、物体の用途に沿った行為を行うことで、出来事全体を共有していると考えられます。そして、子どもが成長して物体と行為の意味を分けて理解できる準備が整うと、物体の名前だけを伝える場面が増えていくのかもしれない。今後は、養育者が子どもの発達をどのように察知しているのかを明らかにしていきたいと考えています。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

子どもの言語発達と養育者の関わり方を調べることができました。ありがとうございました。

5, 6歳児は家事・仕事の分担を どのように考えているのか

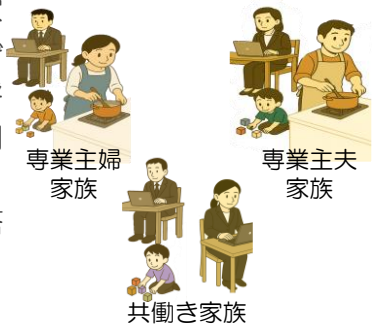
福舩 美奈 (大阪大学 人間科学部 4年)

●背景・目的

近年、働く女性が増え、両親が共働きの家族、専業主夫の家族など、さまざまな家族のかたちが身近になっています。これまでの研究では、専業主婦家族が好まれやすいと示されてきましたが、家族形態が多様になってきていることから、子どもの考え方も変化している可能性があります。本研究では、家事や仕事の分担が異なる家族について、子どもがどのように感じているのかを調べました。あわせて、子ども自身が将来、家事や仕事をどの程度したいと考えているのかについても検討しました。

●方法

5～6歳のお子さま72名に、家事や仕事の分担が異なる3つの家族（専業主婦家族、共働き家族、専業主夫家族）を紹介し、それぞれの家族について、どの程度よいと思うかを尋ねました。また、将来、家事や仕事をするにどの程度関心があるかについても質問しました。保護者の皆さまには、ご家庭の家族形態（例：両親がフルタイムの家庭、専業主婦家庭など）についてアンケートにご回答いただきました。



●結果

【各家族への評価】

専業主婦家族への評価 • 専業主夫家族への評価

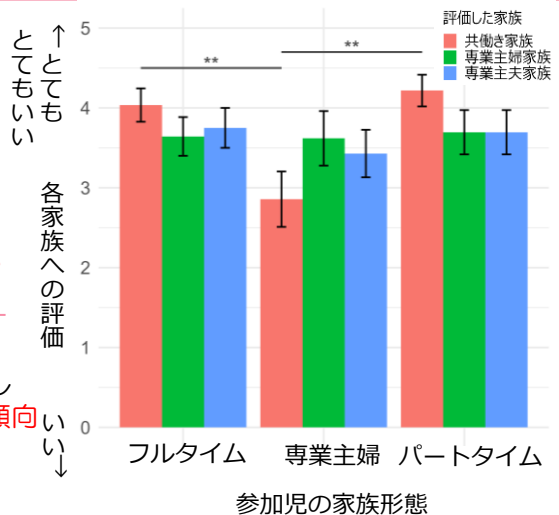
子どもの家族形態ごとに違いはみられなかった

共働き家族への評価

専業主婦家庭の子どもは、フルタイム家庭や母親がパートタイム家庭の子どもよりもよいと感じにくかった

【家事と仕事への関心】

- 子どもの家族形態と、家事と仕事への関心に関連はなし
- 女の子は男の子よりも、家事も仕事もしたいと考える傾向あり



●考察・今後の展望

専業主婦家族は、従来のように、他の家族形態と比べて、特に優れて高く評価されているとは限らない可能性があります。また、共働き家族に対する考え方は、子どもの家庭環境の影響を受けていることが示されました。また、女の子は男の子よりも家事や仕事をしたいと考える傾向にあり、幼い時期から性別に応じた考え方が形づくられている可能性があります。今後の調査では、育児の役割分担に対する子どもの考え方についても検討していきたいと思えます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

調査にご参加いただき誠にありがとうございました。

お子さまが家事と仕事をどのように捉えているのかを知る大変貴重な機会になりました！

赤ちゃんは「いいことをした人」 にいいことが起こると思ってる？

李佳騏（大阪大学大学院人間科学研究科 学部4年）

●背景・目的

「いいことをした人にはいいことが起こり、わるいことをした人にはわるいことが起こる」という考え方は、大人にとっては自然な感覚ですが、こうした「道徳的な報い」の考え方は、どのようにして身につくのでしょうか。赤ちゃんもこのような感覚を持っているのでしょうか。

本研究では、14ヶ月の赤ちゃんを対象に、「助ける」または「邪魔をする」キャラクターに対して、「ごほうび」や「ばつ」が与えられる場面を見たときの反応を調べることで、**乳幼児が道徳的報いについての感覚を持つかどうかを明らかにする**ことを目的として行いました。

●方法

14ヶ月児には、まずあるキャラクターが他のキャラクターを「助ける」または「邪魔をする」動画を見てもらいました。その後、行為をおこなったキャラクターに「いちご（ごほうび）」または「石（おしおき）」が落ちてくるといった結果の出来事が起こる様子を見てもらいました。お子さんが、結果の映像を見る時間を測定することで、「助けたキャラクターにはご褒美が、邪魔したキャラクターには罰があるべき」という考え方（＝報い）を赤ちゃんが持っているかどうかを調べました。

赤ちゃんが「報い」を理解していれば...



●結果

調査の結果、14ヶ月児の「道徳的な報い」に対する理解について、以下の2点が示されました。

- ①先に「助ける」行動の動画を見た場合、行為を行ったキャラクターに「いちご」が落ちてくる結果よりも、「石」が落ちてくる結果に対して、乳幼児はより驚きを示し、注視時間が長かった。
- ②先に「邪魔をする」行動の動画を見た場合、キャラクターに「石」が落ちてくる結果よりも、「いちご」が落ちてくる結果に対して、乳幼児はより驚きを示し、注視時間が長かった。

●考察・今後の展望

本調査の結果から、14ヶ月児は他者の行動とその後生じる出来事を結びつけ、「その人にその結果がふさわしいかどうか」を理解していることが示されました。今後の研究では、子どもたちがさまざまな道徳的行動を観察した後、その行動者に対して自らどのような結果を与ようとするのかについて検討していく予定です。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

たくさんのご協力をありがとうございました！
これからも赤ちゃんの道徳研究に励んでいきます。

子どもは誰に分けてあげる？ — 人や動物、ロボットへの分配行動の研究 —

千々岩 眸（大阪大学大学院人間科学研究科 学振特別研究員）

●背景・目的

子どもは成長の中で、「思いやり」や「公平に分ける気持ち」を身につけていきます。これらの行動は、ふだんは友達や家族など人に向けられることが多いですが、動物やロボットのように、人とは異なる相手に対しても同じように表れるのかは、ほとんど調べられていません。また、私たち大人は、イヌやネコを家族のように大切にする一方で、ブタやウシなどは食べ物として捉えるなど、動物の種類によって接し方が異なることがあります。こうした考え方がいつ身につくのかを知ることも、子どもの心の発達を理解するうえで重要です。そこで本研究では、5～6歳の子どもが、後からシールと交換できるボールを様々な相手にどのように分けるのかを調べました。

●方法

2025年度に年中または年長組に在籍していた5～6歳のお子様29名に参加していただきました。

後から自分の好きなキャラクターのシールと交換できる10個のボールを、自分と、他の幼稚園に通うお友達/公園に遊びに来ているイヌ/牧場にいるブタ/科学館にいるロボットとで、それぞれどのように分けるかを調べました。お友達/イヌ/ブタ/ロボットに分けてあげるボールは、それぞれ相手の好きなものと交換できることを説明しました。

●結果

別の幼稚園や大学の調査室で実施した調査の結果と合わせて報告させていただきます。

子どもたちは、お友達には平均4.08個、イヌには平均4.31個、ブタには平均3.83個、ロボットには平均3.08個のボールを分け与えました。

分け与えたボールの数は、ロボットが最も少なく、イヌが最も多くなりました。

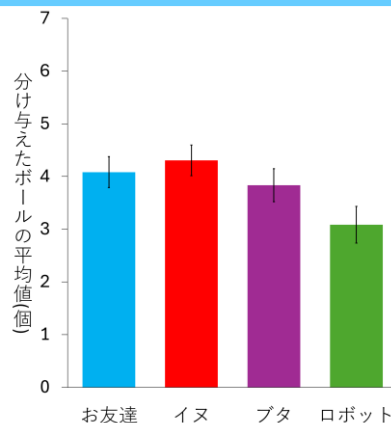
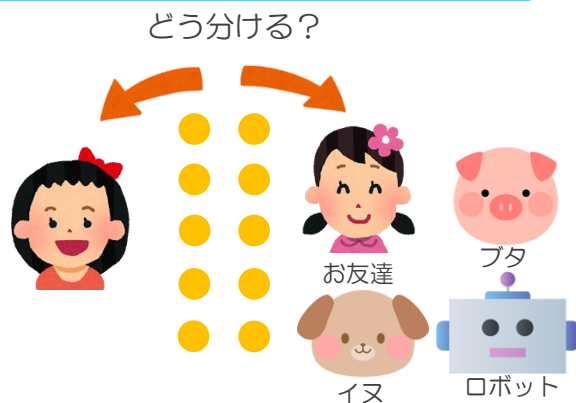
●考察・今後の展望

今回の調査では、子どもたちは人だけでなく、イヌやブタ、ロボットにもボールを分けてあげる様子がみられました。特に、ロボットよりもイヌに多く分ける傾向があり、子どもがイヌを、単なる物ではなく、関わりをもつ相手として捉えている可能性が示されました。また、人、イヌ、ブタの間には大きな違いは見られず、幼児期には生き物に広く思いやりを向ける傾向があることがうかがえました。こうした考え方は、成長する中で社会や文化の影響を受けながら変化していく可能性があります。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

ありがとうございました！ 今後も動物と子どもの関係について研究を頑張ります！

※ご協力いただいた施設 | おおわだ保育園・みくま幼稚園



ルール違反への対応は相手・文化によって変わる？

戸田 梨鈴（大阪大学大学院人間科学研究科 博士2年）

●背景・目的

ルールや道徳に違反している人を見たとき、私たちは、本人にルールを直接教えてあげたり、他者（先生や親など）を介して注意したりと、様々な対応をとります。大人では、どの対応をとるかは、相手との関係性によって異なることが明らかになっています。では、子どもたちも、関係性によって、異なる対応を使い分けると考えているのでしょうか？また、このような区別は文化によって異なるのでしょうか？

●方法

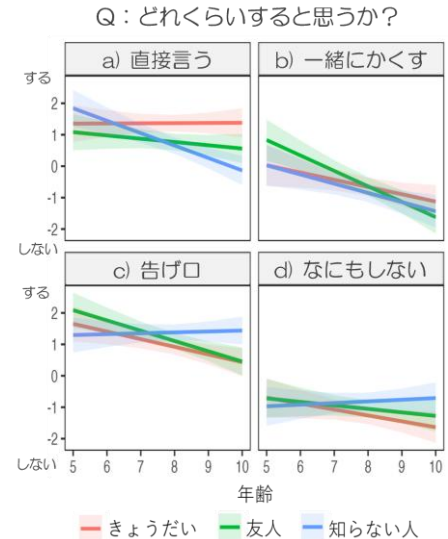
5～10歳のお子さま106名に、「主人公がルール・道徳違反をしている人を見かける」というお話を聞いていただきました。この時、主人公と違反者の関係性は①きょうだい ②友だち ③知らない人のいずれかでした。その後、主人公が以下の4つの行動について、それぞれどの程度行いそうか等を評価していただきました。そして、お子さまの評価が主人公と違反者の関係性によって異なるかを調べました。また、これらの評価が日本とアメリカの子どもで異なるかを調べました。

- a) やめるように直接言いに行く
- b) 一緒にかくす
- c) 先生に告げ口をする
- d) なにもしない

●結果

それぞれの対応に対する評価は、年齢によって異なることが示されました。年少児では、どの対応においても関係性による区別はみられませんでした。一方、年長児は関係性によって、各対応をどれくらいしそうかの評価が異なっていました。たとえば、a)「直接言う」はきょうだいに対して、c)「告げ口」は知らない人に対して、最もしそうだと評価されていました。

また、アメリカの子どもは、日本の子どもより関係性によってどの対応をしそうかを、より区別していました。たとえば、アメリカの子どもは、日本の子どもより、きょうだいや友人に対してはb)「一緒にかくす」をしそうだと考えていました。



●考察・今後の展望

子どもたちは、ルール違反を目撃した時、年齢があがるにつれて、相手との関係性を考えた上でどのような対応をとるかを考えていることがわかりました。また、日本の子どもは、アメリカの子どもと比べて、関係性にかかわらず、ルールや規範を守る対応をとると考える傾向があることがわかりました。このような研究が進むことで、子どもの規範意識がどのように発達し、文化の中でどのように育まれるのかが、さらに明らかになることが期待されます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

ご協力いただきありがとうございました！こうした研究を通して、子どもたちの規範意識や道徳について、さらに明らかにしていきたいと思っております！

※ご協力いただいた施設 | うのクラブ・原尾島子ども園

「わるいこと」への対応にはどんな動機がある？

戸田 梨鈴（大阪大学大学院人間科学研究科 博士2年）

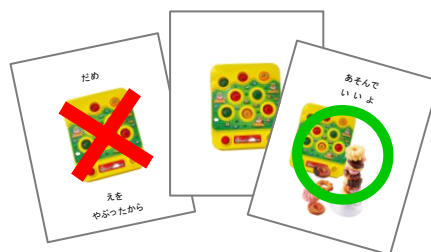
●背景・目的

子どもたちは、お友達とけんかしてしまったときや嫌なことがあったとき、幼児期の早い時期から相手をゆるすことが示されています。一方でルール（規範）に沿って行動できていない相手を見たとき、「～したらいけないよ！」などと、相手にルールを教えてあげることもあります。では、子どもたちはこのような行動の理由として、どのようなことを考えているのでしょうか。

●方法

5～6歳のお子さま98名に、友人の絵を破ってしまう子ども（違反者）の動画を見ていただき、この違反者に対する対応として、以下の3つのうちいずれを行うかを選んでいただきました。

- ① 違反者のおもちゃを取り上げ、**道徳を教える**
（ただし、自分もおもちゃを我慢する必要がある）
- ② **何もしない**
- ③ 違反者に新しいおもちゃをあげる（**ゆるす**）



その後、以下の7つの項目について、どれくらいそう思ったかを答えていただきました。

- | | |
|-----------------------|---|
| 道徳を
教えるに
関連する項目 | ▶ 報復 ：（違反者）にも嫌な気持ちになってほしかったから？ |
| | ▶ 教訓 ：絵を破ったらだめだと教えてあげたかったから？ |
| | ▶ 再犯防止 ：（違反者）がまた絵を破ると思ったから？ |
| 何もしないに
関連する項目 | ▶ 報復回避 ：（違反者）が仕返ししてくると思ったから？ |
| | ▶ コスト回避 ：（参加児）もおもちゃで遊びたかったから？ |
| ゆるすに
関連する項目 | ▶ 同情 ：（違反者）がおもちゃで遊べないかわいそうだと思ったから？ |
| | ▶ 関係性維持 ：（違反者）と仲良くなりたいと思ったから？ |

●結果

違反者に対する対応は、「何もしない」>「ゆるす」>「道徳を教える」の順に多く選択されていました。また、**報復・教訓**の動機は「道徳を教える」を選択したお子さまで、**コスト回避・同情・関係性維持**の動機は「何もしない」「ゆるす」を選択したお子さまで高くなっていました。**再犯防止**の動機は選択にかかわらず、すべてのお子さまで高くなっていました。

●考察・今後の展望

子どもたちは、ルール・道徳違反を目撃した場合、異なる動機をもち、それぞれの動機に基づいた対応を選択することがわかりました。また、「道徳を教える」対応を選択しない場合でも、再犯を防ぎたいという気持ちは強く、ルール・道徳違反に対してとても敏感であることが示されました。今後もこのような研究を通して、幼児期の道徳や規範の発達について理解を深めていきます。

＼調査にご協力くださった方々へひとこと／

ご協力いただきありがとうございました！
子どもたちの規範意識や道徳について、さらに明らかにしていきたいと思えます！

※ご協力いただいた施設 | 桜宮児童センター・沢池幼稚園・友渕児童センター・みくま幼稚園